

【表現学関連分野の研究動向】
日本文学研究(近代)

西尾 元伸

2019年の研究動向として、いくつかの取り組みや論考を紹介したい。

『日本近代文学』第101集(日本近代文学会、2019年11月)では、特集「近代文学研究における〈資料〉の可能性」が組まれた。そのなかで、渡部麻実「堀辰雄「(出帆)」と『萬葉集』——古の歌を歌うこと、あるいは防人歌を歌わない防人たち——」は、堀の晩年の小説草稿「(出帆)」が、『萬葉集』の取材やリルケの影響によるものであることを確認したうえで、「方法としての『萬葉集』」を問題とする。「(出帆)」では、歌から固有の背景を引き剥がすことが至るところで行われるという。そのようにして、作品内の古歌は集団的な共鳴を生起させるものとなっていく。渡部氏の論考は、『萬葉集』の古歌が引用され、新たな感情の表現として再構成されていく様相を明らかにしている。

須田千里「愚弄する美禰子——「三四郎」試論——」(『国語国文』第88巻8号、2019年8月)は、漱石『三四郎』を丁寧読みなおし、ズーデルマン *The Undying Past* のヒロインであるフェリシタスや、イブセンのヘッダ・ガブラーが美禰子の造形に与えた影響から、美禰子の実像をとらえ作品を解説する。だが、美禰子は決して西洋文学のなかの女性そのままではなく、須田氏が「野々宮に求愛させるために美禰子にできたのは、三四郎を利用することくらいだった」と述べるように、当時の社会を生きるひとりの女性であった。須田氏の論考は、美禰子という

女性をはじめとする『三四郎』の表現が、漱石独自の創作であるとともに、その読書体験に左右されるものであることを示していよう。

『昭和文学研究』第78集(昭和文学会、2019年3月)では、特集「〈日本語文学〉の問題圏」が組まれた。〈日本語文学〉とは、「植民地やディアスポラの文学、さらには日本語を母語としない作家によって日本語で書かれた文学作品を指す」。「日本語」「日本文学」という枠組みを問い直す試みであった。ここでは、宮内淳子『少女の友』に見る台湾表象——「新八景」シリーズに他者像を探す——を紹介したい。1929.10～1930.12に『少女の友』に掲載された「新八景」シリーズ(日本各地をイラストと詩で紹介する)には、「北海道新八景」のような例外を除いて、少女たちの西洋への憧れが植民地や「内地」地方在住の少女を描く際にも一律に使われ、シリーズの日本像を平板にしていたという。それは、凶らずも「植民地主義をひそかになぞるような身振り」であった。論考は幅広い問題圏を提起するものだが、いずれにせよ文学(あるいは絵画)表現に対する時代の制約は避け難いことが理解されよう。

いずれの論考も大変手間のかかる資料調査を基に論じられたものである。文学作品の表現が、どのように生成されるかについて示唆的であろう。

(帝塚山大学)